

愛・地球博

春の遠足で、高校1年生の担任として愛知万博に行ってきた。「愛・地球博」とも名付けられたこの催しで、世界の社会環境や地球の自然環境を知り、考えるきっかけになればという思いで企画したものです。

実際は国内の企業、パビリオンなどに人気が集申し、会場建設において絶滅危惧種の生物の保護がおざなりで環境問題への配慮が欠けるとして、世界自然保護協会や日本野鳥の会等の参加が見送られた愛知万博。私は、3月末の下見の際に少し会場を回りましたが、遠足当日はずっと、緊急時のための本部としたパノラマレストランから、会場を見下ろしていました。

生徒たちとは、社会科の先生がつくってくれた万博の歴史の資料を使って、事前学習をしました。

産業革命以降、18世紀後半くらいから産業振興を目的に博覧会が開かれるようになり、1851年

ら、地球の歴史を知り、今を見つめ直す時代へと移り変わっているのなら、それは、この35年間のひとつの反省省のかもしれない。

時間に追われて

生徒たちは、遠足をとでも楽しみにしていました。5〜8人ほどの班になって行動するために、班ごとに分かれて行程表をつくるホームルームも盛り上がり、クラスごとのバスの中でのレクリエーションも、楽しく計画されていきました。

心配は、大阪から会場へは高速道路が整備されていても片道2時間30分かかること。会場での時間をできるだけたくさん確保してあげようと思えば、朝の学校出発は7時30分、帰りの会場出発は3時30分がぎりぎりの許容時間で、280人の生徒たちには、うっかりと遅刻することのないように、強く念を押さなければいけなくなりました。

にロンドンで開かれた大博覧会が第1回の万博といわれているようで、フランスのエッフェル塔も1889年の万博で造られたもののようです。20世紀になって、万博はオリンピックのように開催地の調整が行われるようになり、入場者がピークに達したのが6422万人を集めた1970年の大阪万博でした。

万博は元来、人類の科学技術の最先端を紹介しながら、自然環境の内側に便利な社会環境をつくり、つなげていき、そのことが経済発展にも貢献してきたのかもしれない。しかし、近年の万博は、そもそも誘致の動

機が、地元の経済発展となつてしまっていて、実際、そのことが重視されてきました。

大阪万博では、当時小学生だった私は、アメリカ館の月の石を見る長い列に長時間並んだけれども結局入ることができなかったことを覚えています。

38万キロメートル離れた月を短期間で往復する科学技術が礼讃され、今回も、J.Rは時速580kmのリニアモーターカーを宣伝し、ロボットやバーチャル映像の展示も盛んですが、目玉は、偶然自然界で冷凍保存されていたマンモスです。

いたずらに未来を夢見た時代か

自然環境と社会環境 〜便利さが下げる暮らしの質〜

地球の自転や公転による大きな周期とは別に、社会では細かな時刻を定め、人々はそれぞれ約束した時間に合わせて暮らしています。当日は幸い、大きな遅刻をする生徒もなく楽しい遠足になりましたが、数人が数分遅れ、一応注意をしなければいけません。しかし、そこが教育の難しいところで、その日のその生徒の体調や事情、努力の度合いを十分に把握せず、ただ一律に叱るだけでは、生徒たちの暮らしを本当の意味で守ることができません。

日常の学校生活でも、遅刻に対するプレッシャーをかけ過ぎて、遅刻しそうになると欠席してしまったり、閉まりかけている扉にむりやり入り込もうとしたり、一か八かで信号を無視して自転車飛ばして事故を起こしたりするようでは本末転倒です。約束の時間は大切にしたいですが、それが一人ひとりの命や暮らしを大切にすること

よりも優先されるのはおかしいからです。

尼崎で起こったJ.R福知山線の脱線事故は、数分の遅刻を気にするあまり、多くの命が犠牲になってしまいました。運転士にかけられていたプレッシャーが、本当に大切なものを見失わせていたのであると考えると、それは子どもの世界だけの話ではないわけです。

ホテルと星空

私たちは、地球という自然環境の内側にある、人類がつくり上げた社会環境の中で暮らしています。

夜が来ても星を見上げることのない大人たち。6月が来てもホテルと出会うことのない子どもたち。経済社会の便利さが時間のゆとりを失わせ、情報社会のバリアが本当の自然とふれあう癒しを遮断しているとしたら、私たちの「暮らしの質」は向上しているといえるのだろうか、会場を見下ろしながら思いました。



勝村久司 文
text: Hisashi Kasunuma

PROFILE◎かつむらひさし
1961年生まれ。京都教育大学天文学教室卒。大阪府立高校教員。90年に長女を医療事故で亡くし薬害や情報公開の市民運動に関わる。著書に『はくの「星の王子さま」へ』（幻冬舎文庫）等。
<http://homepage1.nifty.com/hkr>

— 連載3 —

星の子と月の詩

